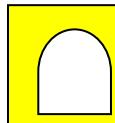


日吉台地下壕保存の会会報



第145号
日吉台地下壕保存の会

ある獄中の記

会長 阿久沢 武史

コロナ禍の中で2021年の重い春を迎えました。会の活動も大きな制約を受けていますが、会員の皆様の励ましに支えられ、動きを止めることなく少しずつ進むことができています。地下壕の見学会は、残念ながら慶應内に限られ、一般向けにご案内できない状態が続いています。今年度の総会についても、昨年と同様、皆様にお集まりいただく形ではなく、会報による報告や議案の提示となる予定です。明るい出口がなかなか見えませんが、ご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

現在、会の活動の一環として日吉の海軍に關係された方々からの聞き取りの記録をまとめています。同時に戦争の記憶を語り継ぐために、体験談や資料などを広く募集しています。

昨年、『英国人捕虜が見た大東亜戦争下の日本人』(デリク・クラーク著・和中光次訳／ハート出版)という本を読みました。シンガポール陥落後に捕虜になったイギリス人兵士の回想記です。大森(現在の平和島)にあった東京俘虜収容所での生活や過酷な労働、食料事情、空襲の体験などが綴られています。ここには500人以上の捕虜が収容され、彼らを理不尽に扱う軍人が何人も描かれますが、誠実で公正だった日本人の中に、私の妻の祖父の名前を見つけたことは、家族にとって大きな驚きとなりました。私は義理の祖父に会ったことはありません。ただ、敗戦直後の体験(日記)が私家版として印刷されていることは知っていました。『我が獄中の記～戦犯容疑者となった筆者が綴る獄中生活132日間の記録～』と名付けられた小冊子で、遺品の中にあった日記を没後20年以上経って家族がまとめたものです。今から20年ほど前のことですから、亡くなつて40年以上になります。

義理の祖父は慶應で学び、外資系の貿易会社に就職しました。1943(昭和18)年の応召の時は34歳で、結婚して娘(私の妻の母)も生まれていました。英語が話せたため大森の収容所で通訳兵として庶務と労務を担当し、捕虜の待遇改善などに努めたそうです。ところが、敗戦後すぐに巣鴨プリズンで獄中の人になりました。日記は1945(昭和20)年11月17日の出頭の日から始まり、翌年3月28日の釈放までの記録です。身に覚えのない嫌疑をかけられ、判決への不安と家族への思い、獄中での生活が詳細に綴られています。元捕虜からの訴えで米軍当局が調べ直し、「人違い」であることがわかりました。実際にには衣類や薬、食べ物などをこっそり運び、「命の恩人」と慕われていたそうで、戦後も友人として付き合いの続いた元捕虜の方がいました。

【目次】

巻頭言【1-2p】 ある獄中の記

会長 阿久沢武史

出前授業【2-4p】

★日吉台地下壕の出前授業

運営委員 岡本雅之

★「コロナ」下 地下壕見学会が出来ない中で

副会長 喜田美登里

聞き取り【4-7p】 ある兵士の軍隊体験記(2)

運営委員 遠藤美幸

秘話【8-9p】 霞ヶ浦海軍航空隊と霞月楼

運営委員 小山信雄

連載【10p】 海外戦跡めぐり(16) 古都南京

運営委員 佐藤宗達

講演【11-13p】 2020.11.7 ガイド養成講座第3回

二瓶治代さんの戦争体験 文責 運営委員 山田 譲

秘話【14-15p】 日吉寄宿舎の放浪の歴史

副会長 亀岡敦子

★戦中戦後

会員(元日吉寮生) 芹沢 宏

本の紹介【15p】 「わがまち港北」第三巻

報告【15p】 「戦争暮らし」～小池汪写真展のこと

副会長 亀岡敦子

活動の記録【16p】 2020.11～2021.3

副会長 喜田美登里

私たち家族は、イギリス人の元兵士が書いた手記から、ある時突然に、家族に連なる人の人物像（人柄）に出会いました。子供たちにとっては、もちろん会ったことのない未知の人ですが、確かな繋がりのある人です。それは命の繋がりと言い換えることができます。敗戦後の混乱の中で、無実の罪を着せられた人はたくさんいたと思います。無念のまま命を落とした人もいたでしょうし、生涯にわたって傷を負った人もいたでしょう。残された日記や体験談は、本人にとっても家族にとっても好ましくないケースが無数にあると思います。語られる話よりも語られない話の方がはるかに重く、苦しいものでしょう。語り継がれる記憶もあれば、永遠に忘れ去られる記憶もあります。それらに向き合い、過去の封印を解くことは、時として残酷なこともあります。

今回、私たち家族がふれたのは、祖父の優しさや公正さだけでなく、その行動の背景にあった強さも含まれます。「(彼は) 本当に素晴らしいジャップだ。彼は我々に、日本は戦争に負けると話していた」と評された人物像は、家族にとって大切なレガシー（遺産）になるとと思います。義理の祖父が愛用した腕時計は、私の義理の父に受け継がれ、父没後のいま、私の手元にあります。1950年代の古い自動巻き時計ですが、今でも正確な時を刻んでいます。

出前授業

★日吉台地下壕の出前授業(日吉台小6年生88名)について 運営委員 岡本雅之

コロナ禍で昨年2月末の大綱中学2年生(3日間280名)の見学を最後に、地下壕の一般見学は中止となった。これまで日吉地区の小学6年生は毎年見学にやって来ており、再開の見通しがつかない中、資料だけでもということで、昨年見学にきた6校に資料提供を申し出、お渡しした。

その中で日吉台小学校(各学年3クラス、生徒数514名)からは「授業」を依頼された。何度も学校側と調整し、3月1日(月曜日)の五时限(1時40分～2時25分)に実施することになった。以下、実施した初めての「出前授業」の様子を報告する。

参加ガイド6名(山田譲・喜田・上野・佐藤宗達・田中・岡本雅之)。パソコン操作・説明は山田、画面の解説を喜田・上野が担当。

6年生88名の生徒は体育館の床に間隔をあけて座り、舞台正面のスクリーンを見ながらガイドのパワーポイントによる説明を聞いた。

まず喜田さんの挨拶及び保存の会の説明。その後パソコンを操作し説明に入る。日吉台小学校の戦後すぐの状態を米軍撮影の空撮写真(1947年7月9日付)で説明。校庭の三つの防空壕や学校周辺の空襲の跡、日吉の丘公園ふもとの土砂(艦政本部地下壕掘削の残土)などを説明(5分)。また日吉の海軍地下壕と寄宿舎・チャペル等地上施設、無線機材などを写真によって解説した(10分)。



日吉台小学校体育館

次に「アジア太平洋戦争と慶應日吉キャンパスの歴史」について高校生の見学会で使っていいるパワーポイントを使って説明した(15分)。そのあと海軍が使った特攻兵器の写真を見せながら説明。回天・震洋・伏龍のカラーイラスト、岩井さん作成の回天・伏龍の手書きイラスト、沖縄での米軍接収の桜花の写真など(6分)。最後に喜田さんによるまとめ(3分)。日本人の死者数310万人、そのうち2/3の200万人は最後の1年、連合艦隊司令部が日吉に来てからの1年で亡くなった。日吉は戦争の命令を出したところ、加害の戦争遺跡という面も持っている。連合艦隊司令部地下壕を知ることで被害、加害の両面を考えてほしい等。

その後質問を受けた。「震洋は知らなかった」「モールス信号でどんなことを送っていたのか」「防空壕に入れなかった人はいたのか」など。

最後に生徒3名がそれぞれ感想を話してくれた。「昔の日吉は田んぼと畠だったが海軍が来て地下壕を作り戦争をした。改めて戦争は怖いと思った。広島、長崎は知っていたが今日のお話で自分達の住む日吉に戦争があったことが理解できた等」。予定通り45分間で説明を終わり、質疑応答10分。2時35分に終了した。

学校に出向いての説明、初めてのことであったがまづまづの出来だったと思う。生徒たちも皆しっかりと聞いて、私語もなく最後まで集中して画面に向き合ってくれた。やはり写真や図を使った解説は効果ありと思う。特に特攻兵器の写真・図には興味深く感じているようだった。生徒たちから感想文を頂けるということなので期待したい。

終了後、校長先生と懇談したが、小学校では戦争の話は授業では無いようだ。中学でやるとの事。私の個人的な感じだが、そういう小学生に対してはこのパワーポイントで説明した「アジア太平洋戦争と慶應日吉キャンパスの歴史」は難しすぎるのではと感じた。また「地下壕」というと子供達は防空壕を思い浮かべるようだ。日吉の地下壕は一般の人のためでなく、海軍の軍事施設であることを強調する必要もあるのでは。

これからも色々と工夫しながら平和学習対応を考えたいが、今回のような出前授業を行った上で、地下壕見学を実施すれば更に理解が深まるとは思う。いずれにしても現場を見ることが一番重要なのでコロナの早い終息を祈りたい。

★「コロナ」下 地下壕見学会ができない中で…

副会長 喜田美登里

◇日吉地区 6年生に資料を配布

「コロナ」に明け暮れているうちにもうすぐ年度が替わる。

慶應義塾大学日吉キャンパスでは一部以外はリモート授業が続き、学生の姿も相変わらず少ない。地下壕見学会で毎年案内する約2000名の3分の1程度は小・中・高生で、特に日吉地区の小学校6年生は毎年見学にやってくる。「コロナ」の影響下、2020年2月末の大綱中学校2年生の見学会を最後に「日吉台地下壕」への市民の入坑は中止になった。再開の見通しが立たないまま、今に至る。保存の会は6年生が「戦争」の単元を学ぶ11月～1月頃に1校100名程度をガイド7,8名で案内し、ガイド内容や配布資料も工夫してきた。20年近く続けてきた案内ができない今年度の6年生に資料だけでも提供したいと考え、昨年見学に来た6校と今年度開校した箕輪小学校に資料提供を申し出て1月中にお渡しした。地下壕資料以外に日吉の空襲被害や日吉地区の縄文から戦争遺跡まで、各時代の遺跡図なども添えた。お会いした先生方は「歴史」は自分たちの生活する地域から学ぶ事が大切、と話されていた。日吉台小学校からは「授業」を依頼され、3月1日に伺う事になった。新型コロナウイルス感染状況下、距離・換気の対策をとって、体育館でパワーポイントを使用し、6年生88名にお話することができた。保存の会は講演、展示等も行ってきたが、現存する遺跡の実物を見ることが重要と考え、見学会に重点を置いてきた。このような資料提供や「出前授業」で少しでも今の「空白」を埋められればと思う。

★日吉台小学校は旧日吉台国民学校、校舎を海軍省人事局功績調査部が使い、校庭に3個のコンクリートの防空壕が作られた

◇中学校の「平和学習」に資料提供

11月に地下壕の資料を提供した青葉区谷本中学校の学校司書さんから「平和学習」の報告をいただいた。中学2年生の平和学習で、資料館の閉館等、見学や聞き取りにも出られない中、学校司書と担当教諭が集めた資料をもとに6組×6班が模造紙にまとめた「平和学習」。「松代大本営」や保存の会のパンフレットを基にした「日吉台地下壕」もあった。

◇日吉台地下壕の紹介が… <文春ムック「永久保存版 半藤一利の昭和史」>

少なくなっていた見学会の問い合わせ、最近は団体の来年度企画以外に個人の問い合わせが少し増えていた。「半藤さんの本に載っているでしょ。見学会何時ですか？」慌てて買いました。第7章『半藤さんが案内する「昭和史を歩こう』に靖国神社、松代大本営、原爆ドーム等と共に「連合艦隊司令部」として記載され、「見学情報」も。連合艦隊司令部は半藤氏の『レイテ沖海戦』『日本海軍の興亡』等々に登場する。「小沢中将は、豊田大将の陣頭に立たぬ作戦指導に、大いなる不信を持っていた。つぎの決戦が真に最後なら、連合艦隊司令長官が先頭に立って指導すべきである、と考える」

聞き取り

ある兵士の軍隊体験記（2）-戦場体験編-

大橋中一郎さん

運営委員 遠藤美幸

満州へ出陣

アジア・太平洋戦争が始まった年に20歳になった大橋中一郎さん（現在98歳）は、翌年1月に現役兵として六本木の東部第6部隊に入営した。大橋さんたち初年兵は、2ヶ月余の内地での初年兵教育（会報第114号参照）を終え、1942年春頃、満州歩兵第675部隊の通信中隊に配属された。部隊は、新京（当時、「満州国」首都、現、長春）から歩いて1時間ほど荒野で、ソ連（現ロシア）と満州の国境警備の任務にあたった。ソ連軍の戦車部隊が南下し、満州に侵入することを想定した実地訓練が行われた。地雷のような爆弾を抱えて一人用の穴を掘って身を隠し、ソ連軍の戦車が来たら爆弾を放り込むという訓練だったが、この地で実際に戦車どころかソ連兵の姿を見ることがなかった。

満州第675部隊の原隊は福井県の鯖江第33連隊である。この連隊は「南京事件」（1937年12月）で有名な「光華門」（現在、門はないが城壁とトーチカが現存）から南京城に最初に入城した強力な福井部隊である。そこへ関東（東京と埼玉）出身の初年兵が入隊したのだ。関東連隊の初年兵と福井連隊の3年兵が一緒に軍事訓練を受けることになった。福井出身者は粘り強く兵隊としても強かった。関東の初年兵は、福井の兵隊に気合を入れられた。

無線通信兵の訓練

大橋さんをはじめ無線小隊の兵隊はほとんどが通信の未経験者でモールス符号（電信で用いられる「トン・ツー」のような可変長符号化された文字コード）を一から叩きこまれた。

満州の冬は極寒だ。氷上に通信機材を置き、兵隊は機材の前に伏せて交信をした。まるで冷凍まぐろのごとく横たわり極寒に耐えながらの実地訓練だった。手がかじかむ。凍傷が怖いが、零下の中でも手袋（厚手の手袋）を外して電鍵を打った。

そして満州の夏は猛暑だ。しかし湿度がなくカラッとしていて日本の夏と違う。ここでは水が命だが生水が飲めない。民家の井戸水はアメーバ赤痢の温床で要注意だ。上官は飲み水にはとても厳しかった。敵弾よりも水が飲めない方がつらいこともあった。

さらに、夏の炎天下でのガスマスクを装着する訓練もきつかった。訓練が終わると「兵舎まで走れ！」と、小隊長のかけ声が飛ぶ。兵舎まで走って、倒れ込む兵隊も出る。訓練は厳し

くとも落伍者は出さない。それを出さないように古年兵が気合を入れるのである。そして初年兵係の上等兵が倒れそうな兵隊の鉄砲をそっと持つてやるなど良い塩梅に手を貸すのだ。

暑さ寒さでつらいのは人間ばかりでない。通信隊には必ず馬の世話係がいる。馬には通信機材を運ぶ重要な役目があった。水や餌を十分にやらないと疝痛（馬の腹痛を伴う病気の総称）を発症する。馬も兵隊と同様に怪我や病気をさせては兵力低下を招くので大切に扱うのだ。大橋さんは満州で、乙種幹部候補生の試験に合格した。下士官となり部下（兵隊）をもつ身となる。

ソ満国境から中国戦線へ

1943年に入ると日本の戦局は劣勢になる。2月のガダルカナル島からの撤退。4月には山本五十六連合艦隊司令長官の墜落死。5月には北太平洋上のアリューシャン列島のアツツ島守備隊全滅。11月にはギルバード諸島のマキン島・タラワ島で日本軍が相次いで全滅した。

雲行き怪しくなった戦況下で、同年12月、大橋軍曹は満州の通信部隊から中国戦線の第5航空軍司令部空地連絡中隊（隼3193部隊）へ転属となり、新京（現、長春）から牡丹江へ単身で移動した。この通信隊は、軍司令部と飛行機との無線通信をもって作戦を展開する新部隊（空地連絡中隊）であり、大橋軍曹は同部隊の分隊長となる。

1944年の年明けとともに上海の大場鎮飛行場で飛行機との通信連絡の実地訓練をした。この部隊が交信する飛行機は第5航空軍の第44戦隊の直接協同機（通称「直協機」）という。直協機とは隼一式機のような戦闘機ではなく、低空、低速で情報収集や軍事物資の投下や引き上げなどを行うが、米軍機に遭遇したら一巻の終わり。たちまち撃ち落されてしまう。中国戦線での航空戦は隼一式戦闘機が主力機であったことを付記しておく。

米軍機が制空権を掌握するようになると、通信場所を探知され、直協機から通信電波を出せなくなった。そこで空地連絡中隊からの送信が主体となり、通信隊は「米軍機P51飛来、回避せよ」などの情報を直協機に伝え、敵機からの攻撃の回避に役立った。やがて地上からの通信電波も敵機に探知され送信が難しくなった。

大橋さんは出陣前に上海の街に出た。その時の上海は日本と戦争をしている雰囲気はなく、一見、「平和」な様子だった。街角の集会場で割烹着姿に「国防婦人会」と書いた襷（なわき）のような布を肩から掛けた婦人たちが白いご飯と味噌汁をふるまってくれた。美味しかった。久しぶりに目にした日本女性の白い割烹着姿に内地の母を思い出した。

大陸打通作戦-漢口飛行場へ

上海の大場鎮飛行場の演習を終えて、大橋さんの属する通信中隊は、上海から漢口、武漢、長沙、衡陽を目指す、いわゆる「大陸打通作戦」に従軍した。

この作戦は戦争末期の1944年4月から翌年1月にかけて50万人以上の兵力を投入した最大規模の陸上作戦であった。立案者は参謀本部の作戦課長の服部卓四郎である。作戦の主な目的は3つ。①中国大陸を縦断し、東南アジアから資源を運ぶ陸上輸送路を切り開く。②日本本土の空襲を防ぐため中国奥地の米軍飛行基地を攻略する。③蒋介石軍を制圧し国民政府に打撃を与える。作戦は河南省での戦い、湖南省長沙・衡陽での戦い、広西省桂林・柳州の戦いの三段階に分かれていた。大橋さんは長沙・衡陽の戦いに参戦。日本軍は2千kmも進軍した。



大橋中一郎さん（満州第675部隊伍長時代）

河南省から湖南省、広西省、貴州省までの大陸打通は概ね成功したとされているが、戦争末期の見通しの立たない絶望的な抗戦期の同作戦の意味については今なお疑問が残る。日本兵だけでなく中国兵の被害も甚大で、44年4月から12月までで60万もの兵力を失ったといわれている(『アジア・太平洋戦争辞典』2015年、吉川弘文館を参照)。

さて、話を戻そう。飛行機と地上で連絡を取り合う空地連絡中隊の無線通信隊は、中国大陸の飛行場を拠点に進軍した。雨季の中、上海から漢口飛行場に向かう悪路に苦労した。

1944年に入るとさらに戦況は悪化し、太平洋上の絶対国防圏も突破され、地上戦でも無謀な作戦の代名詞となった「インパール作戦」も失敗。にもかかわらず日本の敗色が色濃くなる中でも広大な中国大陸を縦断する大陸打通作戦は続行された。

大橋さんは、当時漢口の街を歩きながら、中国の現地住民たちの方が大本営の参謀よりも戦況を正確に把握していたと語る。その裏付けとなるエピソードがある。中国商人がいうには、当時一番価値が高い通貨が米ドル、次が中国の通貨、日本の通貨(軍票)はなんと最低の価値だと……。これが日常の売買の現実だった。彼らは日本の敗戦が近いことをとっくに知っていたのだ。戦況は貨幣価値に表れていた。

白螺磯飛行場へ

第5航空軍司令部空地連絡中隊は激戦の長沙攻略に向かったが、大橋分隊は白螺磯飛行場へ行くように命令を受けた。白螺磯にて第44戦隊の直協機の戦隊に配属。任務は白螺磯飛行場と長沙攻撃隊との通信確保である。通信所は地下壕に開設。米軍機が毎日夜間攻撃に飛来。直協機の出撃が多く、大橋分隊の送受信作業は昼夜を徹して行われた。炸裂音と爆音が響きわたる。日本軍も速射砲で応戦。戦闘状態になる。大橋さんは待避壕の中で身を隠しながらそっと腹に巻いた「千人針」に手を当てた。

長沙へ進出



大橋さんの大陸打通作戦地図

長沙攻撃の最中、白螺磯通信所は昼夜を通して航空機との送受信に追われた。長沙攻略の報を受け、大橋分隊も中隊に合流するために長沙に向かった。長沙飛行場内に通信所を設置し、衡陽との通信連絡の任務を全うした。しかし、長沙攻略は形ばかりで制空権は完全に米軍に支配され、度重なる米軍機の空襲に昼間の行動が制限され、食事もままならず。それでも「現地調達」を強いられた地上部隊に比べて航空部隊は恵まれていた。数日後、大橋分隊は次なる目的地の応山へ向かう命令を受けた。

1944年7月のサイパンの陥落を機に日本本土への米軍機の攻撃も容易になり戦況の悪化に拍車がかかると、作戦の遂行の意味が失われていった…。

応山にて中隊長より「前進に及ばず」との通信が届いた。

大橋さんはこう語る。

「大陸打通作戦とは何だったのか…。点と線(都市と交通)を結ぶに過ぎなかった。広大な中国を占領なんかできやしない。」

陸士や陸大出の将官や佐官らは、机上で作戦を立案し指揮するが、彼らは戦場の実態をどこまでわかっていたのか。彼らが戦場を視察し激励に来たことも指揮を執ることも一度もなかった。どんな命令にも従って戦場で命をかけて戦うのは我々兵隊と下士官である」。

戦場のハーモニカ

戦場だからと言って兵士はいつも撃ち合いをしているわけではない。戦場で軍事訓練もない。敵襲に備えて身心を休ませるつかの間の戦場の余暇である。戦場では鉄砲の弾と人の声しかない。兵士には楽器の音色は格別だった。

前号に書いたが、大橋さんは小学校の頃からハーモニカに魅了され、中学でハーモニカバンドに入部して腕を磨いた。指導は南部信義さん。当時のハーモニカの世界的奏者だ。若い時、大橋さんは一流のハーモニカ奏者に演奏の手ほどきを受けた。当時、大橋少年は日比谷公会堂で恩師のクロマチックハーモニカによる「チゴイネルワイゼン」の独奏を聴いて「チゴイネルワイゼン」の虜になってしまった。

大橋さんは中国の戦場にハーモニカを持っていった。戦場で攻撃前の待機中は落ち着かないし気が重いのだが、ハーモニカの音色が兵士たちの気持を盛り上げた。大橋さんは戦友に「楽しいわが家…」をやってくれと言われた。これは当時流行った「私の青空」という歌の歌詞の一節である。うまく出ない音もあって満足いく演奏はできなかつたが、戦場でのハーモニカ演奏は兵士の心を癒した。「ふるさと」のような唱歌から流行歌まで思いつくままに吹いた。長沙では他の部隊にも頼まれてハーモニカを吹いて大変喜ばれた。演奏のお礼に南京豆をもらったのが良い思い出である。

＊＊＊

その後、大橋軍曹は中国の応山から朝鮮へ「転進」となった。「転進」とは当時の軍隊用語で、事実上の撤退を意味する。

1945年8月15日、大橋さんは敗戦を京城（現、ソウル）で迎えた。

大橋さんがいま伝えたいこと

兵士の数だけ戦場体験がある。体験は皆違うが、兵士は祖国のために「大和魂」をもって死ぬまで戦った。当時の兵士の一途な忠誠心をいまの人たちにも知ってほしい。兵士たちがどういう気持ちで死んでいったのか。兵士の純粋な祖国を思う気持ちを利用して最後の一兵まで戦わせた軍の上層部の責任は重い。彼らの声を代弁できるのは最初から最後まで戦争に身をおいていた私の役割だと思う。

個人主義だけではだめだ。国のために命を捨てるのは行き過ぎだが社会のために一心に身を投じることも必要だと思う。

戦争は二度としてはいけないが、単純に戦争＝悪で反対、と短絡的な結論で終わらせてほしくはない。

※本稿は、『きらめきプラス』2020.7月号(85号)最後の証言「厭戦」(歴史研究家 遠藤美幸)に掲載されたものです。



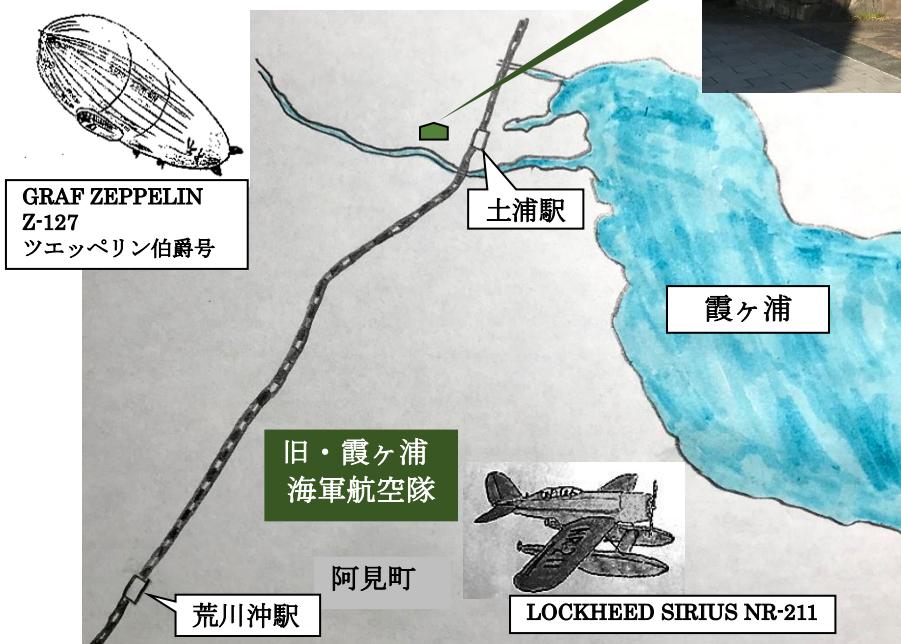
白梅（大倉山公園 梅林）

秘話

霞ヶ浦海軍航空隊と霞月楼

運営委員 小山信雄

昨年の秋、職場の仲間と霞月楼に行く機会がありました。霞月楼は茨城県土浦市にある老舗の料亭で1889(明治22)年の創業、9室の閑静な個室からは四季折々赴きの変化する美しい庭園も楽しめます。今まで数々の著名人の方々も訪れており、1922(大正11)年に創設された霞ヶ浦海軍航空隊(現在の陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地)に関わるさまざまな人々も霞月楼を訪れています。

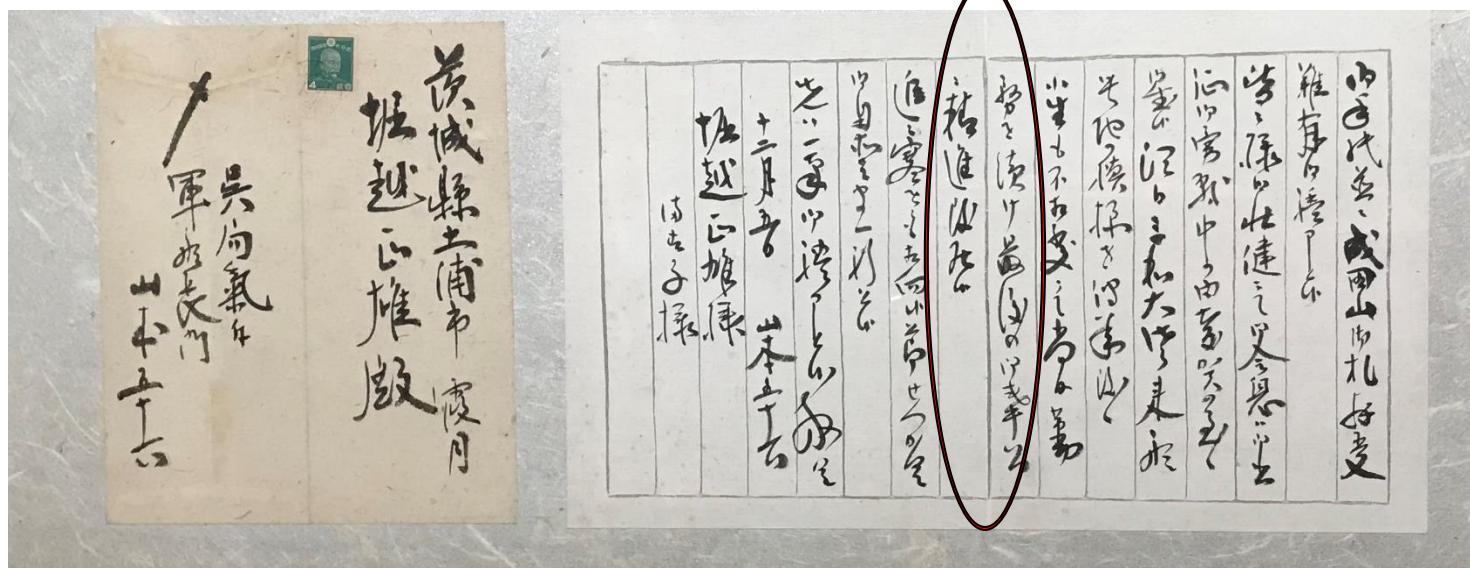


1924(大正13)年には、霞ヶ浦海軍航空隊の副長として赴任した若き日の山本五十六が訪れるようになり、1929(昭和4)年にドイツツェッペリン社が開発した当時最新鋭の巨大飛行船(全長236.6m)が、世界初の飛行船による地球一周の中継地として霞ヶ浦湖畔に舞い降りた際、二階大広間で御一行の為の宴席が催されています。

1931(昭和6)年には大西洋単独無着陸飛行を初めて成し遂げたチャールズ・リンドバーグ夫妻も霞

ヶ浦に着水後(愛機ロッキードシリウス号)、土浦駅前で町民の大歓迎を受けた後、霞月楼を訪れています。

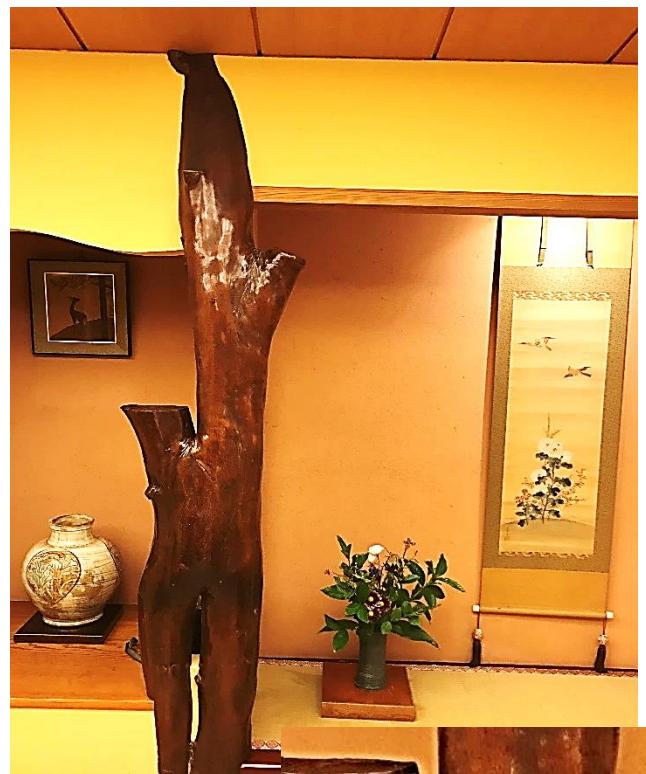
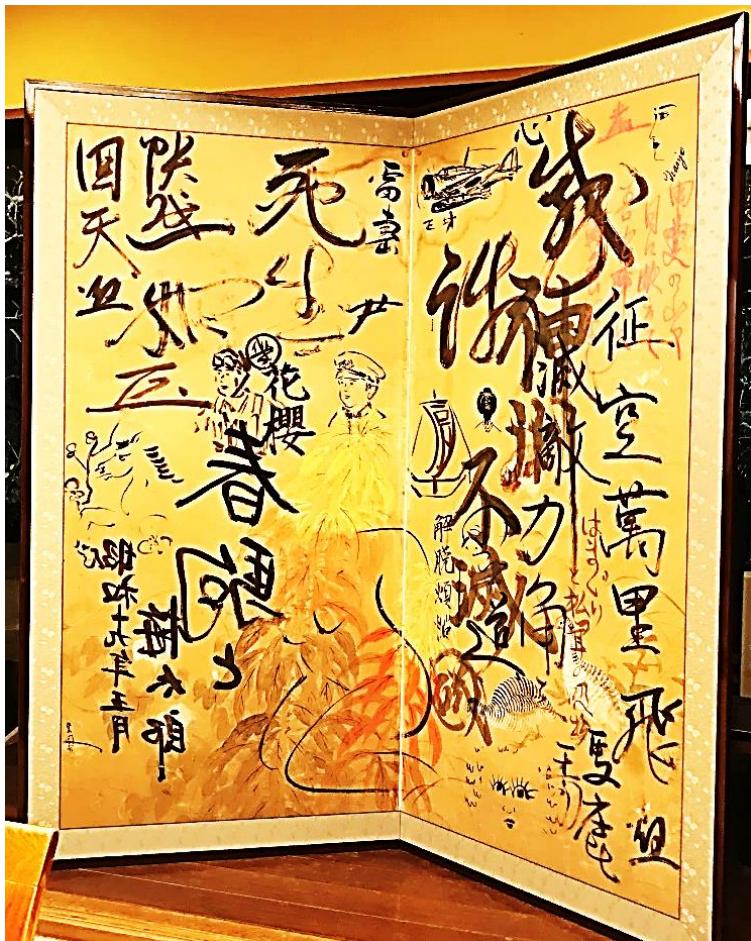
10年後、1941(昭和16)年12月5日の日付で、第26・27代連合艦隊司令長官となった山本五十六から一通の手紙が霞月楼に届きます。成田山のお守りのお礼と共に手紙の文中には「最後の御奉公に精進致し居り候」の言葉が書き記されていましたが、呉に停泊中の連合艦隊旗艦「長門」から発送されたこの日付けは、正に日米開戦の緒戦となる真珠湾攻撃3日前のことでした。



私達が会食したのは「牡丹の間」という14畳の掘り炬燵形式の個室で、窓の外には部屋明かりに照らされた中庭の樹木がひっそりと輝いていました。美酒と美味しい料理をいただきながら、大女将より部屋の柱に傷があるとの説明を受けましたが、童謡「せいくらべ」の「柱のキズはおととしの5月5日の～♪」という訳ではなさそうです。

1944（昭和19）年7月にサイパン島守備隊が全滅し、絶対国防圏が破られると、アメリカの大艦隊は一路、日本及び日本の支配下にある南方（比島等）方面を目指し西進を加速。戦局はますます悪化し、本土決戦が叫ばれるまで日本は追い詰められて行きます。こうした中、同年10月には飛行機に搭乗したまま敵艦に突撃、という特攻作戦が始まり、翌年8月15日の終戦の日迄、継続されることになります。作戦といつても生還できる可能性はゼロに等しく、約3,900名の主に若者が還らぬ人となりました。

霞ヶ浦航空隊から多くの若者が特攻機で南の空へ飛び立ってゆくことになりましたが、霞月楼を訪れた若者も多かったとのことです。この柱の傷は宴席の時に出来た刀傷とのことですですが、決して彼ら若者たちを咎めることもなく、現在に至るまで当時のまま残されています。



また送別の宴に際して、当時の屏風に残された寄せ書きも見せていただきました。

「神州不滅」「滅敵」「征空萬里飛」「特攻兵器：回天、花櫻=桜花」「はまぐりと松茸のお吸い物」等の言葉のほかに、女性の名前（逆さ文字）やイラスト等も描かれています。中でも「死生一如（しせいいちにょ）」という言葉がとても気になりました。仏教用語で、人は必ず死ぬ、生きることと死ぬことは表裏一体、死があるからこそ私たちは今日を懸命に生きようと努力できる、といった意味とのことですが、特攻を目前にした彼らの気持ちは一体どのようなものだったのか！！ 現在の私達には到底想像もできないような、重く複雑な心境だったのだと思います。

とにかく霞月楼での送別の宴のお酒、食事、会話等は本当に忘れがたいことであったに違いありません。現在の平和な世の中で何不自由なく飲食できるのは実に有難いことと、改めて感謝しなくてはと心より思います。



連載

海外の戦跡めぐり(16) 古都南京 中国

運営委員 佐藤宗達



太平天国歴史博物館 入口

雄大な長江と明代の城壁が自慢の南京は北京・西安・洛陽と並ぶ四大古都のひとつである。明王朝など10王朝が都とし、近代では太平天国の革命政府が南京に置かれ、孫文・蒋介石・汪兆銘は南京を首都とした。「太平天国」広州郊外花県生まれの洪秀全は科挙試験に失敗、自身をキリストの弟と思い込み、同じくキリスト教を信奉する上帝会に合流し、清朝打倒を掲げて1850年蜂起した。太平天国は厳格な規律と統制力で勢力を伸ばし、1853年3月南京を占領し天京と改称した。

清朝は清軍だけでは対抗できず、英・仏の力を借りて1864年7月南京を奪回した。14年にわたる何千万人ともいわれる犠牲者を出した人類史上最悪の内戦と云われている。南京中心部にある太平天国歴史博物館は太平天国の王府の一部でした。

1911年の武昌起義に始まる辛亥革命により1912年1月1日南京において中華民国が成立、孫文が臨時大統領になり臨時政府を置いた。袁世凱に交代した後、1919年孫文は中国国民党を創建し1921年広州に革命政府を確立した(広東政府)。1925年孫文が病死すると蒋介石、汪兆銘らが後継者となり、1927年蒋介石の国民革命軍が南京を占領、4月南京国民政府とし、北伐の完了後1928年10月10日南京を首都とした。1931年9月の満州事変から日本軍との戦争になり、1937年7月の蘆溝橋事件を期に戦争が激化、日本軍は12月12日南京を占領した(蒋介石は11月20日重慶に遷都)。そして日本軍の後押しで南京に中華民国維新政府が発足した。



復元された洪秀全天主宝座

一方蒋介石と意見が異なる汪兆銘は1938年12月重慶を脱出、日本軍の占領地域外に新政権をつくり、日本との和平を図ろうとした。しかし、国民党員も軍もほとんど彼につかず、日本軍の傘下でしか活動できなかつた。1940年3月30日、日本軍の後押しで和平救国のため南京遷都宣言を出し、汪兆銘を首班(後に主席)とする新政府を設置した。そのため重慶政府と南京政府が並立する事となつたが、日本は南京政府を承認して交渉相手とした。南京政府は1945年8月15日まで継続したが、その後の政治の舞台は北京へ移つた。南京中心部に残る総督府には孫文の臨時政府、蒋介石の執務室などが現存しております。



総統府の玄関



蒋介石の執務室

講演

2020.11.7. ガイド養成講座第3回(箕輪町集会所会議室にて)

にへいはるよ

東京大空襲・亀戸にて——二瓶治代さん(当時8才)の戦争体験

文責 運営委員・山田譲(二瓶さんに加筆・訂正をいただきました)

<戦争はジワジワと来る>

3月10日の夜の記憶だけは今も鮮明です。戦争は急に来ません。ジワジワと来ます。当時、小学校は国民学校と言っていました。小学校は子どもの成長に合わせた教育をします。しかし国民学校は、その時の国策に合った人間をつくる幼児教育をします。子どもの成長に合わせません。私は昭和18年に入学し、卒業の時は小学校にもどっていました。

日本は当時ずっと戦争状態でした。1937年の日中戦争から本格化しました。中国、朝鮮をはじめとするアジアの国々で、日本は残酷な行為をしていました。近隣の国に武力をもって攻めていく侵略でした。あまり残酷なことをするので国際連盟から批判されました。それでアメリカとも戦争になりました。1941年12月に開戦。しかし1942年4月には米軍の空襲を受けました。でも私たち子どもは、戦争は海の向こうで兵隊さんたちがやっていて、自分たちを守ってくれていると思っていました。日本は神様の国で、空襲されても神風が吹いて追い払ってくれると教えられていました。

1944年12月に三鷹の中島飛行機に初空襲がありました。しかし、下町の方ではピンときませんでした。1945年1月には銀座のど真ん中に空襲がありました。その時、はじめて大人たちがザワザワしありました。「勝ってると言ってるけど本当だらうか。」父がそう言うと別の人「そんなこと言っちゃいけないよ」とたしなめしていました。2月の雪の日にも空襲がありました。「これはへんだ」と大人たちは思ったそうです。そして3月10日。アッと思ったときは、もうどうしようもなくなっていました。治安維持法で自由に自分の意見が言えない時代です。言葉と文字を奪われていました。そうすると人が人でなくなります。戦争はそのような情況をつくりだし、人々が気付いた時には手遅れになります。

<その日の夕方「また明日あそぼうね」>

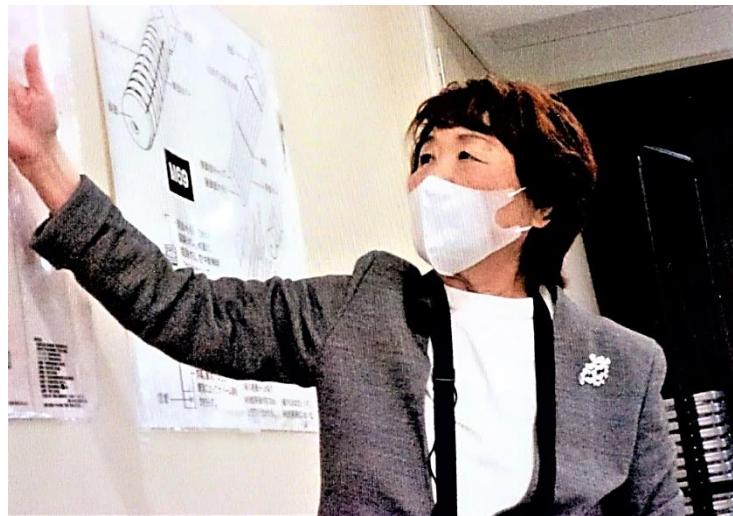
日本人の戦没者は310万人といわれますが、吉田裕さん(注1)は少なすぎると言っています。そのうち空襲犠牲者は公式には50万人。しかし早乙女さん(注2)は5~60万人と言っています。3月10日だけで10万人。大変な数です。

その日は北西の強い風が吹きまくり、とても寒い夜でした。アメリカが考案した以上に焼けました。当日夜、私は家族5人で江東区の亀戸でくらしていました。家の前は千葉街道(現・京葉道路)があり、当時は都電が走っていました。学校に行くと男の先生がどんどんいなくなります。学童疎開もありました。

しかし3月は卒業式があるので、6年生を中心に疎開していた友だちがもどってきました。とてもうれしかったです。3月9日はみんなで暗くなるまで戦争ごっこをして遊びました。そのころは戦争で死ぬのは名誉なことと言われていたので、男の子は勇敢な軍人になることを夢み、女の子は従軍看護婦になるのがあこがれの仕事でした。夕方になり母が「ご飯だよ」と呼びにきたので、「また明日遊ぼうね」と言って別れました。

<3月10日の夜>

灯火管制で暗い明りの中での夕食で、その後ラジオを聞いたりして家族の団らんがあり、8時に寝ました。しかし10時頃に空襲警報がありました。



二瓶治代さん

父は当時45才で徴兵召集ギリギリの年でした。その父が外を見に行き「B29、2機が千葉の方に飛んで行ったから大丈夫」と言いましたが、その後また空襲警報が鳴って、父が「起きろ、今度は様子が違う。」と言うので服を着替えました。外に出たら火の粉が飛んでいました。人が千葉街道を駅の方に走っていました。昼間、遊んだ防空壕に入りました。京葉道路の脇に、お隣りと2軒で1つを使う防空壕がありました。兄は勤労動員の工場に行っていて、母、妹と3人で入りました。父は防空壕に入ってはいけませんでした。防空法で、消火活動をしなければいけませんでした。「火を消さないで逃げたら国賊だ」といわれます。火は広がって、錦糸町方面から亀戸の方向に人が走って来ます。亀戸は焼夷弾のターゲットから少しはずれたので、みんなこちらに逃げて来ました。

空襲が激しくなると父が「防空壕から出ろ。中に入っているとムシヤキになるぞ！」と言った、お隣りのおばさんが引きとめてくれましたが、私はその手を振り払って母と妹と3人で出ました。外の様子はすっかり変わっていました。火の粉が真横から吹きつけ京葉道路は

「火の川」になっていました。その中を人がおおぜい走っていました。赤ん坊はお母さんの背中で燃えていました。子どもの手を引いて逃げていましたが、子どもは走れずにころんでしまいます。倒れた子どもが燃えていました。私たち4人も駅の方に逃げました。しかし駅までは行かれませんでした。自分の家も回りの家も燃えていました。消防士が水をかけていましたが全く消えません。消防士の服も燃えだしました。消防士は逃げることを許されませんでした。目の前で生きたまま焼かれて死んでいきました。砂町は運送屋が多く、馬や牛をたくさん飼っていましたが、その馬や牛が亀戸の方に逃げてきました。大八車ごと、馬も飼主も燃えて焼き殺されました。馬が4本の足を広げて突っ張って、そのまま立ったまま焼けていました。私はそれを土手の中腹からずっと見ていました。そのことが頭に焼きついています。その時、お雛様が燃えちゃうと思いました。3月3日が過ぎても、しまわざ飾つておいてもらっていました。

私の防空頭巾が燃えだして父が「頭巾をとれ」と言って、頭巾のひもを取る時に父の手を離してしまい、妹ともはぐれてしまいました。一人で逃げ迷っていましたが、とつぜん真暗な所に出ました。そこに人が立ったまま燃えていました。緑色のような炎があがりました。こわいけれど、とてもきれいに見えました。その火を消してあげようとして手をのばしたら、うしろで女の人の声がして「危ないよ」と言われました。その時、誰かに手を引っ張られました。「お父さんなの？」と叫んだが答はきこえませんでした。そのうち動けなくなりました。亀戸駅のそばの交差点のど真ん中で、その人は私の上に覆いかぶさりました。私は気を失っていました。たくさんの人が上に折り重なりました。男の人の声が「おれたちは日本人だ。死んでたまるか。大和魂。」とずっと言っていました。その声は父でした。

<次の朝、その後、終戦、そして今>

朝になって、下から父に引き出されました。「ここを動くな」と言わされて、そこにじっと立っていました。父はどこかに行ってしまいました。回りはすごく静かで、「ここはどこだろう」とつぶやいたのを憶えています。

父が母と妹を連れて来ました。煙で目をやられていました。道が熱くて靴もなくなって、裸足でつま先だって歩きました。父は目が見えないので「まっすぐ行け」と言って、私が手を引いて歩いて行きました。黒い死体につまずきました。母親が子どもを抱きしめている死体が多かったです。小さな赤ちゃんが死体の中で生きていて、ミーミー泣いていました。足を止めたら父が「こんな時だめだ」と言って、そこから引き離されました。

家のあたたりまで来ましたが、どこが自分の家だったかわかりません。一面の焼野原です。そこに前日まで使っていた花柄のお皿があつて、それは私の好きなお皿だったので、「ここなんだ」と思いました。水道の蛇口が残っていて、ひねったら水が出て初めて水を飲みました。そこへ泥だらけの兄がもどってきました。防空壕の中では、あのおばさんも亡くなっていました。いっしょに遊んだマサオちゃんたちとも、それきり会えなくなってしまいました。

避難所があるので行つきましたが工場の焼け跡でした。妹が足に大けがをしていました。炊き出しの女学生から、お握りをいただきました。家のところに戻つてみたら、マサオちゃんのお父さんに会いました。小松川の方が焼けてないので、そっちに行きました。

その後親戚の家を転々としました。今までやさしかった親戚の伯母は人が変わったようになり迷惑がられました。妹のケガにウジがわいたのを「臭いから家に入るな」と言われました。市川の方に病院が開いたと聞いたので、母がウジ虫のわいた妹をおぶり、私も一緒に行きました。火傷した人が多勢、待っていました。やっと診察の番が来た時、医者に「油を持っていますか。油がないと見てやれない。」と言われました。母が「油はありませんが、どうか診てください。」と土下座して頼みましたがダメでした。あきらめて帰ろうとしたら、知らない男の人が自分の治療用の油をくれました。優しさと、苦しんでいる私たちへの思いやりの心を持った方のお陰で、妹は命を救われました。戦争は人間のすべてを壊します。しかし思いやりをかけてくれる人もいます。妹は今でも、ふくらはぎがただれていますが元気に暮らしています。

その後、私は転校をくりかえして、母の知り合いのいる岡谷（長野県）で終戦になりました。戦前は織物工場で、戦争中は銃器をつくっている大きな工場主の家でした。母はその工場で働く人の食事をつくり、父、兄もその工場で働きました。私は友だちもいなくて、工場の階段でボーッと座っていたら、母に呼ばれてラジオ放送（玉音放送）を聞きました。国民がはじめて「神の声」を聞いたのです。母は「戦争に負けたのよ」と言いました。私は立ち上がって手をたたいて、「うれしい、もう空襲はないね」と言ったら、兄が飛びかかって「バカヤロー」と言って殴られました。「日本には神風が吹いて必ず勝つ!!」と言いました。まわりの大人たちは、それを止めもせず何もせず、気がぬけたようになっていました。東京に帰ったら、浮浪児がいっぱいいました。私の心の中に残った傷は、ずっと残っています。

今、日本に戦争はありませんが私は戦争の時代を生き残った者として、戦争だけは絶対にやってはいけません。戦争も、戦争の後にのこるものも、ものすごく悲惨です。いつの時代でも国どうしのいさかいはありますが、武器ではなく言葉と文字を使って、時間がかかるでも解決の道をさがして、戦争だけは避けてほしいとおもいます。

Q&A

質問：死体の臭いはしましたか？

二瓶さん：臭いはまるで感じませんでした。

質問：空襲のあと、行政からの救援・援助はありましたか？

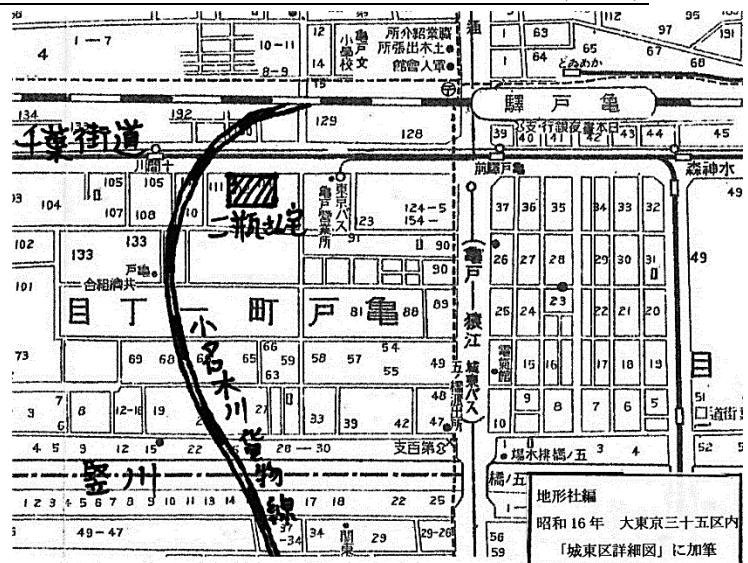
二瓶さん：何もありませんでした。棄民です。「拓北の兵隊」というのを知っていますか。

空襲被災者に北海道で開拓しろと政府が募集しました。拓北開拓農民兵という。行ってみたらひどい所で、結核でずいぶん亡くなつたそうです。

感想：具体的な話でイメージができました。悲惨という言葉を使わなくても、よく伝わりました。馬の四つんばいとか、すごくよくわかりました。

(注1) 吉田裕さん——東京大空襲・戦災資料センター館長、一橋大学名誉教授
二瓶さんは同センターで活動されています。

(注2) 早乙女（勝元）さん——同上・前館長、作家



秘話

日吉寄宿舎の放浪の歴史

★戦中戦後

副会長 亀岡敦子

1937年、日吉キャンパスの南西端、眼下に桃畠が広がり丹沢山系と富士山が見える地に、谷口吉郎（当時30歳代の東京工業大学助教授）設計の白い小ホテルのような3階建て3棟の日吉寄宿舎が完成しました。当時の大学寮には珍しい6畳ほどの個室で、南側の広い窓と作り付けの家具、床暖房まで備え付けられており、1棟40名、合わせて120名の寮生の中には留学生もいたそうです。何かを強制されることなく、自治が認められていました。

しかし、1943年12月には20歳以上の寮生は、学徒出陣で慶應義塾大学を去ると同時に寄宿舎も去ることになり、思いを書きつけた戸棚も残されているとのことです。翌年春には待っていたかのように、海軍が日吉の丘にやってきました。44年3月10日海軍と慶應義塾はキャンパスの各建物についての賃貸契約（45年3月31日まで）を結んでおり、その中には寮と敷地も含まれていますから、学生は住むことができなくなりました。

苦肉の策として、日吉本町2丁目の体育会宿舎（野球部とラグビー部の合宿所）からも学徒出陣のため空き室ができたので、そこに一般の学生も住まわせることにしました。日吉寮の灯を消さないためなのか、ここは「日吉本町寮」と名付けられ、寮生たちは「ホンマチリョウ」と呼んでいました。現在その建物はなく、外国人教員用宿舎ネッスルハウスとなりました。

しかし、終戦後戦地から別当薰ほかの部員が続々と帰ってくると、46年7月からは、大倉山の丘に建つ白亜の大倉精神文化研究所の付属宿泊施設である「富嶽荘」が、寄宿舎として使用されました。学生たちは空腹でしたが、高橋誠一郎が研究所の講演後に立ち寄り、三田の思い出話を語り、職員住宅に仮住まいしていた評論家長谷川如是閑との交流など、楽しい思い出はたくさんあるとのことです。

大倉山を出た寮生たちは、49年5月からは三鷹の中島飛行機工員寮2棟を使用しました。医工文学部80名くらいいたようで、舍監と副舍監の教員は家族で住み込んでいたそうです。そして50年4月には約20名が、ようやく日吉寄宿舎中寮に戻ることができました。長い放浪の歴史です。私たちが知る寄宿舎の歴史とともに、住む場所を追われた寮生たちの歴史も、語り継ぐべき貴重な戦争の歴史ではないかと思われます。同時に、何とかその場所を見つけ交渉した塾当局の苦労が推察されます。

この原稿は、会員である芹澤 宏氏と竹田行之氏に何度もお目にかかり、伺った話や文章などを参考にしました。『三田評論』2015年8・9月号掲載の「終戦の日前後」を芹澤氏の許可を得て転載します。また当会刊行の『フィールドワーク 日吉・帝国海軍大地下壕』（平和文化）に橋本迪夫氏のコラム「戦時下の寮生活」が載っています。

★終戦の日前後

会員（元日吉寮生）芹澤 宏

終戦前年より海軍の司令部は日吉寄宿舎を接収していました。寮生の数名は現在の普通部近くにあった体育会寮に移ることになり、私もそこに寝泊まりしました。八月十五日の天皇の玉音放送は先輩の室で聴いたが、よく聞き取れなかった。

この五月に亡くなった竹田行之君は、河内徹也さんと私の三人で、暑さの為、井戸水を浴びた想い出を書き残した。

連合艦隊司令部の去った後、塾からの要請で毛布を持って寄宿舎に泊まりに行った。司令部内は整理され、下士官が南寮の長官室を案内してくれた。浴室の檜の浴槽は兵士が手送りでボイラー室から湯を満たしたようだ。中寮三階に泊まり、夜間に地下壕を探した。工学部の河内氏は配電盤を操作し、電信室や長官室を見て廻った。電信室には蛍光灯と壁掛電灯が残されていた。長官室は和風の造りに掛け軸の跡が見られた。百二十六段を昇って中寮の中庭に戻った。

アイケルバーガー麾下の第八軍が進駐するまでは、ジープの将校が検分に来たり、豪州兵が昼食に立ち寄った。ある日、中寮の個室の扉を蹴飛ばして、将校と小銃を構えた兵士に会う。将校が何の建物だと尋ねたので、大学の学寮と答えるとスクールハウスかと納得した。九月の明け渡しの日、司令部の椅子、寝具は米兵により蝮谷から投げ落とされた。私達は獣医学校の牛車に荷積みし、日吉の町へ引き揚げた。

(『三田評論』2015年8・9月号
より転載)



体育会寄宿舎写真「慶應義塾福澤研究センター蔵」
左手奥が野球部合宿所

本の紹介 「わがまち港北」第3巻

港北区の情報紙「楽・遊・学」に20年間に連載された地域エッセイ「わがまち港北」の第3巻が刊行され、港北区の小中学校にも寄贈されました。1, 2巻と共に港北区の歴史を楽しく知る貴重な資料。一家に3冊をおすすめします。書かれたのは大倉精神文化研究所理事長平井誠二さんと研究員林宏美さん。「終戦秘話」の中に各巻日吉関連の記事があります。

『わがまち港北3』地域インターネット新聞社（「わがまち港北」出版グループ）

2020年11月 1650円（税込）

報告

「戦争暮らし」～小池汪写真展のこと

副会長 亀岡敦子

2020年10月7日から30日まで、川崎市平和館で「小池汪写真展 戦争暮らし」が開催されました。小池さんは川崎在住の87歳のプロカメラマンで、70年近く一貫して「平和を願う視点」で地域の行事や、戦争の痕跡を撮り続けており、日吉台地下壕もそのひとつです。

この時期は新型コロナ感染者も少し落ち着いており、来館者も多く、小池さんのいう「遺言のような写真展」は成功裡に終わりました。当会は開催趣旨に賛同し「協賛団体」として名を連ね、亀岡は「上原3兄弟と日吉」のフロアトークを行いました。

今年度の総会について

新型コロナウイルス感染防止のため、昨年同様に会報での掲載で総会に代えさせていただきます。



活動の記録 2020年11月～2021年3月

- 11/20(金) 会報144号 発送(来往舎 小会議室)
- 11/26(木) 地下壕見学会 慶應義塾高校 英語 長野先生クラス44名
☆塾高の授業 「密」を避け、短時間で案内する工夫をした
ガイド7名で20名+24名を2校時、2回に分けて実施、生徒4、5名をガイド1名で案内
- 12/5(土) 第4回ガイド養成講座(日吉地区センター中集会室)
☆ようやく第4回を終了、受講者3名に亀岡副会長から修了証をお渡しすることができました
- 12/10(木) 資料集編集会議・運営委員会(来往舎 205室 小会議室)
- 12/16(水) 地下壕見学会 慶應義塾高校 3Gクラス40名・3Rクラス40名
☆塾高の授業 「密」を避ける対策をした
2校時、各クラス40名にガイド7名、生徒7名にガイド1名で案内
今回と11月の授業共に地下壕の滞在時間を従来の約半分にした

2021年

- 2/25(木) 日吉台小学校の「地下壕」授業の打ち合わせ(日吉地区センター中集会室)
日吉台小学校先生方との打ち合わせ(日吉台小学校)
- 3/1(月) 授業「日吉台地下壕」日吉台小学校6年生88名(日吉台小学校体育館)
パワーポイントで説明 ガイド6名が参加
(1月、2月の運営委員会、1月のガイド学習会はお休みしました)



入場制限が続く日吉キャンパス

○地下壕見学会について

新型コロナウイルスの感染状況下、日吉台地下壕の見学会ができなくなつて1年がすぎました。
「コロナ禍」でも、新年度の活動計画などで「見学会」のお問合せを頂きますが、緊急事態宣言が3月21日まで延期された現在、一般の方の地下壕見学会再開は未定です。

★お問い合わせ・申込は見学会窓口まで
Tel/Fax 045-562-0443 喜田(午前・夜間)



連絡先(会計) 亀岡敦子: 〒223-0064 横浜市港北区下田町5-20-15 TEL 045-561-2758

(見学会・その他) 喜田美登里: 横浜市港北区下田町2-1-33 TEL 045-562-0443

ホームページ・アドレス: <http://hiyoshidai-chikagou.net/>

日吉台地下壕保存の会会報

(年会費) 一口千円以上

発行 日吉台地下壕保存の会

郵便振込口座番号 00250-2-74921

代表 阿久沢 武史

(加入者名) 日吉台地下壕保存の会

日吉台地下壕保存の会運営委員会